

令和6年度「外国人留学生のための能楽鑑賞・体験教室」を実施しました

1. 日 時: 令和6年10月26日(土) 12:20 ~ 17:00
2. 内 容: (1)「外国人のための能楽鑑賞教室」鑑賞
演目:狂言「瘦松」 能「花月」
(2)能楽体験
3. 会 場: 国立能楽堂
4. 参 加 者: 40名(中国10名、ベトナム3名、イラン、ウクライナ、フランス、マレーシア各2名、
アメリカ、イギリス、イタリア、インドネシア、ウズベキスタン、カザフスタン、カナダ、ギリシャ、スイス、
スウェーデン、タイ、デンマーク、フィリピン、ポーランド、ミャンマー、モンゴル、ロシア、韓国、台湾各1名)

5. 実施状況:

外国人留学生に日本固有の伝統文化を体験する機会を提供することで、日本文化に対する理解の深化を図るため、国立能楽堂において「外国人のための能楽鑑賞教室」の鑑賞と能楽体験をあわせた「外国人留学生のための能楽鑑賞・体験教室」を実施、24か国1地域の外国人留学生40名を引率しました。

最初に、「外国人のための能楽鑑賞教室」に参加、解説を聞いた後に狂言「瘦松」、能「花月」を鑑賞しました。「瘦松」は、山賊が長刀で女を脅して持っていた袋を奪うが、油断して女に長刀を奪われて、逆に身ぐるみはがされる、肥松(実入が多い)ばかりか瘦松(実入が少ない)となってしまったという話でした。

「花月」は九州筑紫の国、彦山麓に住む男が、自分の七歳の息子が行方不明になったことをきっかけに出家し、諸国修行の旅に出るところからはじまります。春の都に辿り着いた男は、清水寺に参拝し、門前の人に、何か面白いものはないかと問いかけます。門前の方は、花月という少年が面白い曲舞(くせまい)などをすると紹介し、花月を呼び出し、一緒に小歌を謡います。その後、花月はさまざまな芸を披露しますが、芸を見るうち、僧は花月が自分の息子だと確信し、父であると告げて、共に故郷に帰ることにします。旅立つ名残にと舞を促された花月は、天狗にさらわれて行方不明になったいきさつや父との再会の喜びを謡い舞い、親子して旅立つという話でした。

続いて研修能舞台において能楽体験として謡の体験と動きの体験。講師は観世流能楽師の伶以野陽子氏と小田切亮磨氏が務めてくださいました。今回は源氏物語に取材した能「葵上」を題材に体験を進めます。まず講師が「葵上」の概要を説明、劇中の謡と劇中ワンシーンの動きと能面を実際に着けるとい体験をしました。みなさん、少しの練習で謡も動きも覚えて、とても上手に演じることができました。また、実際に使われている能面が着けられたことを楽しんでいらっしや、参加者同士、写真を撮りあう姿が見られました。

最後に、能舞台の前で写真撮影をして終了しました。

体験と鑑賞を同時に行うことで、理解がより深まったかと思われます。英語での説明もあり、参加者はとまどうことなく演目も理解できていたようで、参加者満足度の高いイベントとなりました。

6. 参加者の感想

- ・能を観るのが初めてだったのでとても貴重な機会でした。演目もとても面白く事前の説明も興味深かった。
- ・能楽師たちの細かい動きやセリフに感動し、オペラのような音楽性に圧倒されました。
- ・日本の精神とリズムが西洋のショーとは全く違うことを心から感じました。
- ・能を観ていると、まるで夢の中に足を踏み入れたかのような感じでした。ゆっくりとした、慎重なペースとミニマルな美しさが、すべての所作に深い意味を感じさせました。仮面と音楽が、まるで時間が止まっているかのような神秘的な雰囲気を醸し出していました。それは魅惑的で忘れがたいものでした。
- ・能楽のような素晴らしい芸術を世界中の人に知ってもらいたいです。
- ・インストラクターの女性がとても明るく説明もわかりやすく、大好きでした。実際に体験できてよかったです。

7. 能楽体験の様子





以上